だれのところに行きますか　　ヨハネ６：６６～６９

ブーム（流行）というものは年々変わりますね。スポーツと言えば昔は野球か相撲でしたが、今は若い人達はサッカーで、昨年はラグビーが加わりました。私も、にわかラグビーファンになって結構盛り上がらさせていただきました。しかし、それも月日が経つと、移り気なのは人の常と言いましょうか、忘れ去られて行きますね。特に今年はコロナ禍が起こり、スポーツどころではありません。

ブームに浮かれるのは、どうやら、現代人ばかりでなく、古代の人々、イエス様の時代の人々も同じだったようです。イエス様が伝道を始め、今まで、誰も語ったことのないような、権威あるメッセージを語った時、人々は、喜んで、イエス様の話を聞きに集まってきました。イエス様は、人々に神のことばを語っただけでなく、足の利かない人を立たせ、目の見えない人を見えるようにし、ツアラート（重い皮膚病）をきよめ、さまざまな病気を治し、悪霊を追い出すなどの目覚しい奇蹟をなさって、神の力を表わされました。それで、多くの人々がイエス様についていくようになりました。特に、イエス様が奇蹟によって五千人もの人々にパンを与えた後は、人々がイエス様を遠くの町までも追いかけるほどでした。人々の間では、口を開けばイエス様のことが話題になるような、大ブームが沸き起こったのです。

しかし、人間は、熱しやすくて冷めやすいものです。イエス様が耳障りの良い話だけでなく、人間の内面の罪深さに触れ、イエス様ご自身に関する真理を明らかにされるようになると、人々は、イエス様からひとり去り、ふたり去りしていきました。人々は、イエス様についていけばいつでもパンにありつけるわけではないことが分かると、イエス様から離れていきました。自分が好まないことを言われると、また離れていきました。群衆だけではありません。「弟子」と呼ばれる人たちも、イエス様から離れていきました。

人々は、イエス様がご自分が天から来られたお方で、ご自分の血と肉を人々に分け与えると言われた時、「これはひどいことばだ。そんなことをだれが聞いておられようか。」（60 節）とつぶやきました。「人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。」（53 節）というイエス様のことばは、たしかにショッキングなものです。しかし、イエス様は、こうした過激なことばを使って、大切な真理を人々に悟らせようとされたのです。「弟子」という言葉には、「習う者」「学ぶ者」という意味があります。彼らが本当にイエス様の弟子、イエス様から学ぶ者であるなら、理解できない時にその意味をイエス様に尋ね、学ぶべきだったのです。また、「弟子」という言葉には「従う者」という意味があります。ところが、この人たちは、イエス様に従わず、イエス様から離れていきました。66 節に「こういうわけで、弟子たちのうちの多くの者が離れ去って行き、もはやイエス様とともに歩かなかった。」とある通りです。この人々は、自分では「弟子」だとは思っていても、本当の意味でのイエス様の弟子ではなかったのです。流行に乗って、イエス様を追いかけていただけの人々だったのです。私の夢をかなえてくれたり、私が喜べるようなことを言ってくれる人とイエス様のことを見ていたのです。

スポーツなら、ブームに浮かれ、騒いで終わってもかまわないでしょうが、イエス・キリストを信じる信仰の場合は、そうであったら、イエス様が私たちに与えようとしておられる大切なものを得られないままで終わってしまいます。みんながイエス様のところに押し寄せてくるといった、いわゆる「ブーム」が下火になり、人々がイエス様から去って行った時にこそ、本当の弟子の真価が問われるのです。それでイエス様は「まさか、あなたがたも離れたいと思うのではないでしょう。」（67 節）と、十二弟子に質問されたのです。

「まさか、あなたがたも離れたいと思うのではないでしょう。」―これは、なんとなく寂しい感じのす

る言葉ですね。イエス様は、多くの人々が自分のところから去っていって、心細くなられたのでしょうか。そうではありません。イエス様は、その働きを始められた最初から、人目につくことをして、数多くの人々を集めることをなさいませんでした。イエス様は、弟子たちを「友」と呼んで、愛し、信頼してくださいましたが、イエス様は、常に父なる神により頼んでおられ、決して人をあてにしてその働きをすすめられたわけでもありません。しかし、だからと言って、「去る者は追わず」「わたしから去りたい人は、どこへでも行くがよい」とも思っておられたわけでもありません。イエス様から去って行くことが、何を意味するかよくご存知のイエス様は、そのことを悲しく思われたのでしょう。人がイエス様に出会いながら、イエス様から何も得ないで去って行くなら、なんと残念なことかと思います。聖書にはイエス・キリストは光であり、真理、いのちであると記されています。光に背を向けて歩いていけばそこに待っているものは陰、暗闇でしかありません。真理、いのちから離れて行けば、そこにはいのちが無いのですから無力な人生しかないのです。自分探しではありませんが「一体、今度はどこに行って本当のものを見つけようとしているのですか？」「残念ながらどこにもありませんよ」イエス様はご自分から去っていく人々を、そんな思いで心から憐れまれたのです。そのお気持ちが「まさか、あなたがたも離れたいと思うのではないでしょう。」という言葉に表れているのです。ですからこの質問は、決して感傷的なものでなく、弟子たちに、「人々は去って行くが、あなた方はどうなのでしょうか。本当の弟子として、最後までわたしに従ってきますか」と、イエス様に従う覚悟を問いかけるものだったのです。

少し前にドイツのハンブルグで、小中高校生約 2,000 人を対象に「もしイエス様が今日ここにおられたら、あなたは何を話したいか、または聞きたいですか」という質問がされました。みなさんならイエス様にどんなことを聞いてみたいですか？その結果は、一番が「イエス様　なぜあなたは悪魔に問題を引き起こさせるのですか」（六八・五％）、次に「世界にはなぜ金持ちと貧しい人がいるのですか」（五三・四％）、「失業者のために何かをしてほしい」（四五・四％）といったものでした。どの質問も、現実的で、ドイツの子どもたちならずとも、私たちも、イエス様に聞いてみたいような質問です。私たちは、数多くの質問を持っています。そして、私たちが真剣に求めた時、イエス様は、私たちの人生に起こってくる数々の質問に、すべてではありませんが聖書によって答えてくださいました。ところが、私たちは、「イエス様が私たちに質問したいこと」には、心を留めず、それに答えようとしていないのではないでしょうか。聖書には、イエス様が私たちに問いかけておられることばがいくつかあります。それはどのような質問でしょうか？「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」マタイ 16:15「あなたがたは、キリストについて、どう思いますか。彼はだれの子ですか。」マタイ 22:42 あなたがたは、わたしの飲もうとする杯を飲み、わたしの受けようとするバプテスマを受けることができますか。」マルコ 10:38「あなたは人の子を信じますか。」ヨハネ 9:35「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか。」ヨハネ 11:25―26「あなたはわたしを愛しますか。」ヨハネ 21:16,17　イエス様は、私たちの人生に深いかかわりのあるこれらの質問を、今も、私たちに問いかけておられます。今、自分に対するイエス様の質問に、真剣に答えたいと思うのです。イエス様の問いかけに答えることによって、私たちは、さらに豊かな人生へと進み出すことができるのです。

「まさか、あなたがたも離れたいと思うのではないでしょう。」とのイエス様の質問にペテロが答えます。ペテロは、十二弟子のスポークスマンのような人でしたから、この時も、十二弟子を代表して、答えたのです。ペテロの答えはこうでした。「主よ。私たちがだれのところに行きましょう。あなたは、永遠

のいのちのことばを持っておられます。私たちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています。」群衆は、イエス様からパンを得られないことを知ると離れていきましたが、十二弟子たちは「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出るひとつひとつのことばによる」ことを知っていました。ですから、「あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。」と、言うことができたのです。ユダヤ人は、イエス様が「わたしは天からくだって来た」と言われたのを信じませんでしたが、弟子たちは「私たちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています。」と、イエス様が神から来られた特別なお方であることを信じ、受け入れていたのです。

イエス様は、イエス様に従おうとするひとりびとりが、このように、イエス様が神の子であり、私たちの救い主であることを言い表わすことを願っておられます。イエス様は、弟子に、他の何を知るよりも、それこそ、聖書やキリスト教について様々なことを知ることよりもイエス様が私たちにとってどのようなお方かを知るように、また他のどんなことをするよりも、イエス様への信仰を言い表わすことを願っていらっしゃるのです。イエス様が話題の人だから、みんながイエス様について行くからというのでなく、あなた自身の決断で、イエス様を信じることを求めておられるのです。イエス様の弟子には、イエス・キリストを自分の救い主として自分の心と人生に迎える、決断が必要なのです。

今、世の中の多くの人々は、何を求めて良いのか、どこに向かっていけばいいのか、誰についていけばいいのか分からずにいます。しかし、聖書によって、イエス様を知り、イエス様を信じた私たちは、どこに行けばいいのか、誰についていけばいいのか知っています。私たちは、ペテロと同じようにこう言うことができます。「主よ。私たちがだれのところに行きましょう。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。私たちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています。」イエス様のところに行くこと、イエス様に従うことがその答えとなるのです。

世界を見ると私たちの信仰が確かなものであることの保証として今までは例えばキリスト教国のアメリカの存在がありました。あんなにキリスト教や教会の影響が国全体にあるので安心であると。しかし、それは段々と崩れてきています。今、人種差別や社会の分断化が進んでいます。キリスト教もリベラルか保守かによって価値観が異なります。そんな中にあっては「私はクリスチャン」と言うだけでは足りません。ここで私たちもペテロと他の弟子たちが受けたような質問をもって問われるのです。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」マタイ 16:15「あなたがたは、わたしの飲もうとする杯を飲み、わたしの受けようとするバプテスマを受けることができますか。」マルコ 10:38「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか。」ヨハネ 11:25―26「あなたはわたしを愛しますか。」（ヨハネ 21:16, 17）

私たちも神の力をいただいて、ペテロと同じようにイエス様に真実に答えたいと思うのです。「主よ。私たちがだれのところに行きましょう。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。私たちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています。」果たして我々はどこに向かっているのでしょうか？あなたは誰のところに行くのですか。と問われています。